

## 研究ノート

## ウェズレー・C・ミッチェルの貨幣支出の概念

齋 藤 宏 之

## 概要

ミッチェルは、本稿で取り上げる論文「貨幣支出の遅れた技術」において、金儲けの技法が重視される金銭文化に対して、金を使う技法は遅れを取っていると、合理性の仮定によって消費活動は説明できないと主張する。個人の貨幣支出あるいは家計を経る支出の社会習慣は、ミッチェルの考えでは、金を大規模かつ効率的・計画的に使う企業とは異なり、規格化・合理化されていないからである。しかもミッチェルは、自らの地位を適切に了解させるべく、支出には対抗心や人の妬みを買うような比較を促進することが意図されていることすらあると捉える。

かくしてミッチェルは、家庭生活に一定の方向を与える習慣的な思考・活動様式、つまり支配的な思考習慣である制度に目を向けねばならないと考へ、伝統的経済理論に対する批判も強く意識しつつ、経済行動をそれが埋め込まれている制度に基づいて説明する。制度は個人行動を導く際、強力な作因となるからである。このようにミッチェルは、人間行動が時間と共に変化していく文化環境に起因するという見地に立っていると考えられる。この観点から、ミッチェルが消費行動を動的に捉えた過程を解明した。

## I ミッチェルの制度主義に基づく経済思想

一般にアメリカ制度学派の創始者と目されるソースタイン・B・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen) は、限界効用理論が、人間を「快樂・

苦痛の電光石火の計算機<sup>1)</sup>」と概念的に解釈していると批判し、自身は本能・習慣心理学を用いて独自の思想を提唱した。同じ制度学派に属するウェズレー・C・ミッチェル (Wesley Clair Mitchell) は、そうしたヴェブレンに対し、近代科学と一致する心理学上の概念を案出しようとしているとみていた。そしてヴェブレンが、本能から習慣・制度がどのように生ずるか、その過程を辿ることによって、また人間行動を規定する際、習得と形質がどのように結びつくか、その様式を考察することによって現実の人間の類型を説明しようとしている点に照らし、彼が用いる人間性の概念の優越性を評価した。しかし一方では、「ヴェブレンは、勇猛果敢に新天地へ向かう他の探検者同様、性急な横断旅行をした<sup>2)</sup>」として、彼の略図の詳細は正確ではなかったというのである<sup>3)</sup>。つまり、ヴェブレンのダーウィン主義経済学の概念には思弁性が付いて回っていたのである。統計的検証により初めて可能となる大規模で入念な観察がなされず、よって自身の結論を実証することはほとんどなかった。ジョン・ラーツィス (John Latsis) は、「……ヴェブレンの進化論は彼に続く制度主義者たちが社会進化のモデルを作ることを可能とすることに足りる道具を与えない……<sup>4)</sup>」とすら結論を下

1) Thorstein Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization and Other Essays* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1990), p. 73.

2) Wesley C. Mitchell, "Thorstein Veblen, 1857-1929," *New Republic*, Vol. 60, No. 4, September, 1929, p. 68.

3) *Ibid.*, p. 68.

4) John Latsis, "Veblen on the Machine Process and Technological Change," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 34, No. 4, July, 2010, p. 605.

している。

したがってミッチェルのみるところでは、社会科学はまだ「未熟で思弁的<sup>5)</sup>」であり「力学というより形而上学に、化学というよりも神学に近い<sup>6)</sup>。」ミッチェルは、社会科学は、一種の神学と自らがみなすダーウィン流の思弁ではなく、自然科学、すなわち物理学・化学の方法に従わねばならないと考えた。ジェイムズ・クラーク・マクスウェル (James Clerk Maxwell) を引用して、多様性、蓋然性、近似値<sup>7)</sup>に基づく統計概念を受け入れるよう主張する。物理学においては、数学が必須のツールになって可能となった正確な思考が求められた。「物理学・化学は、石鹸の泡のような豪華な体系においてではなく、作業仮説と観察される過程との関連をめぐり観察と試験、常に批判的な試験という忍耐強い過程によって築き上げられてきた<sup>8)</sup>。」ジョセフ・ドーフマン (Joseph Dorfman) によれば、ミッチェルは、早くも1910年

には、ヴェブレンを臆測から建設的研究に向かわせようとした<sup>9)</sup>。

そこでミッチェルは、心理学研究から行動研究の重要性を学び取り、経済学を「行動の科学<sup>10)</sup>」と定義するに至った。さらに思弁をプラグマティックにテストすべく、プラグマティックな経験的な科学概念、取り分けジョン・デューイ (John Dewey) の道具主義的接近法と緊密な関係を保持しながら、行動を統計的に観察することを試みる。

換言すればミッチェルは、制度主義と量的・統計的・実証的手法を関連づける。制度は個人活動に規範的影響力をもつ。多数の個人行動を規格化するような影響を与えると考えるから、このことが生み出す結果を観察する。社会的因習・規範として人間行動を生み出す制度は、行動を規格化し、大量データにおいて観察でき経験的に発見される型・規則を作り出す。すなわち思考・活動が規格化され、個人活動は共通の型に入れて作られる。そこで行動の型を重視し、制度が生み出す大衆行動を研究する。制度は行動を規格化するから、制度を扱うことは妥当に一般化することに通じる。行動を客観的・経験的に研究するうえで統計を重視し、観察記録を制度的に解釈する。この意味で、ロバート・B・エケルンド2世 (Robert B. Ekelund, Jr.) とロバート・F・エベール (Robert F. Hébert) の「……ミッチェルの研究は、ヴェブレンの研究を拡張したものであったが、ヴェブレン自身は、遂行もしなければ、この上なく役に立つと思ったものでもなかった。……ミッチェルの『制度経済学』が進んだ方向は、ヴェブレン自身の概念とは特に類似していなかった<sup>11)</sup>」との主張は首肯できよう。

そしてミッチェルは、その経済思想を構築する

5) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 51.

6) *Ibid.*, p. 51.

7) Cf. *Ibid.*, p. 35.

この点をめぐってミッチェルは、さらに次のように述べる。

「……多様性、不確実性、不完全な近似の要素は、自然科学の統計的研究に比べ、社会科学の統計的研究においてより顕著である。それでわれわれの統計結果はこれらの不完全性で非常に際立っているのです、仮定した前提に基づいて推論する結論にあまり厳密に近づかない。それゆえ統計的手法の発展は、物理理論に比べ経済学においてより過激な変化を加えるであろう。

……機械論的タイプの思弁は同一性、確実性、不変の法則と連動する。経済学においては、これらの概念は現象に緊密には合致しない。それゆえ観察を究極的には信頼しなければならない。観察を科学水準にまで上げることができるや否や、全く無価値ではないけれども機械論的タイプの研究が得たかなり未熟な近似を断念しなければならない。」*Ibid.*, pp. 35-36.

8) Wesley C. Mitchell, "Letter from Wesley C. Mitchell to John M. Clark." in John Maurice Clark, *Preface to Social Economics: Essays on Economic Theory and Social Problems* (New York: Farrar and Rinehart, 1936), p. 413.

9) Joseph Dorfman, "New Light on Veblen," in *Essays, Reviews, and Reports* edited by Joseph Dorfman (Clifton: Augustus M. Kelley, 1973), p. 197.

10) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 372.

11) Robert B. Ekelund, Jr., Robert F. Hébert, *A History of Economic Theory and Method* (Long Grove: Waveland, 2007), p. 442.

過程で、金を儲ける技術と金を使う技術との関連を重視している。前者に比べ後者が遅れた状態にあるとし、合理性の仮定によっては消費活動は説明できないとする。この点をどのように解釈するのかみとめることとする。これはミッチェルの制度主義に基づく経済思想の解明に直接的に繋がるからである。

そこでミッチェルの「貨幣支出の遅れた技術<sup>12)</sup>」(“The Backward Art of Spending Money”)を取り上げ、検討することとする。

## II 貨幣支出の遅れた技術

金をうまく使うのが難しい原因を、ミッチェルは、散財よりむしろ、個人としてほとんど管理することのない広範な状況に求める。

物々交換というそれ程複雑でない経済組織の下では、また貨幣の使い始めの状況の下では、家族は、財を生産し消費するための単位であるのがほとんどである。その結果代々生産は、ある程度、1つの単位としての家族に基づいていたとミッチェルは考える。

ミッチェルは、分業、市場、産業革命、鉄道などの要因は、相まって、家族から財を生産するための単位としての古き重要性を奪ったとみる。生産は、新しい単位、すなわち営利企業に基づいて再編された。新しい単位は、効率的で、生産される財貨量と得られた総所得の莫大な増加をもたらした<sup>13)</sup>。

ミッチェルによれば、この間金を使うための単位として家族は、植民地時代とあまり変わらなかった。家族より大きく効率的な金を使うための単位を発展させなかった。家庭生活にしがみついている限り、家族は金を使うための最も重要な単位であるし、金を使う技術は金を儲ける技術に遅れを取る。

「家族形態の組織は、金を使う際の女性の支配的立場を樹立している。この立場は、金を使う技術の進歩が遅いことをある程度説明するであろう<sup>14)</sup>。」主婦の課業はとにかくかなり多様である。ミッチェルの所説に従うと、誰であれ、多様な商品の質や価格を専門的に知っていることは期待されていない。この仕事は、家族に代わって営利企業が行うなら、いくつかの部に分割される。部は、専門知識を活用して問題を解決する。質を吟味し、最低価格を見いだす時間と機会をもつ。単独の家族は、自らの欲望に消費者として留意する際、営利企業が行うような分業がもつ利点は得られない<sup>15)</sup>。

また家族は労働節約的機械を利用できない。その結果生活費を、小さな店と比べてすら、効率的に削減することはできない。世帯は非常に小さく、課業は極めて多様で、家事は家中くまなく散在しているのだから、機械は役に立つどころか厄介なものになってしまうとミッチェルは捉える<sup>16)</sup>。

ミッチェルのみるところでは、妻は専門職的には家事には取り掛からないし、自分と夫・子供に関わる人的部分を企業的部分より重んじる。「妻は、人間としての義務と労働者としての義務をはっきりと分けることはできない。……家政は、家族生活の条件下で鋭い専門的な関心をもって遂行される主婦の生活なかで、男性が取引する際に発展させる他の部分と十分には識別されない<sup>17)</sup>。」

ミッチェルは、家庭管理者と異なり、大規模営利企業は事態をより上首尾に管理するとみる。営利企業においては、意思決定をし、政策を発議し、健全な決断を下さなければならないが、署名する以上の権限を行使して仕事を行うことはない。取るに足らない義務から解放されているし、不必要な邪魔から守られている。これに対して小企業の管理者は、自らの精力を多くの業務に分散せざるを得ない。家庭では、ほとんどの場合、主婦は同

14) *Ibid.*, p. 6.

15) *Ibid.*, p. 7.

16) *Ibid.*, pp. 7-8.

17) *Ibid.*, p. 9.

12) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 3-19.

13) *Ibid.*, pp. 4-5.

様な不利な神経が疲弊する状況下で長時間働く。金を賢く使う技術を発展させる暇がある主婦は少ないに違いないとミッチェルはいう<sup>18)</sup>。ミッチェルは次の見解を披瀝する。

「家庭生活の極めて多くの条件が重なって主婦の課業を厳しくするけれども、意外に多くの女性が個人的に成功している。……しかし家族生活に限界があることによって、家庭の優れた頭脳を十分に利用することは妨げられている。……金を使う際、個人の間で発展させる能力を、われわれは単独の家庭の壁の内部において抑える<sup>19)</sup>。」

ミッチェルはこのように家族に基づく支出構造のゆえに金を使う技術が遅れていることを解明する。さらにこの点を仕事それ自体に内在し、構造変化によっては除去しきれない専門的難題に鑑みて分析して行く。

ミッチェルに従えば、生産技術の急速な進歩は、科学知識、取り分け理化学の進歩に基礎を置いている。理化学法則を応用することによって、複雑な機械ばかりでなくデータを修正する効果的な過程を発展させることができている。

同様に消費技術の進歩は科学の進歩によって可能となる。金を使う技術に根本的に重要な科学は、理化学ではなく、生理学や機能心理学である。しかしそれらが扱う主題は、理化学ほど単純でもなければ一様でもないし、実験では制御しにくい。つまり生理学や機能心理学は未発達状態だということである。

ミッチェルは、主婦は、製造業者と異なり、肉体的・精神的発達に関わる科学法則について生理学者や心理学者から十分には学習できていないと捉える。それゆえ主婦の仕事は、未解決の問題を多く生じさせるし、当て推量に関する問題であるし、事の道理から考えてものを作り運ぶ仕事と同じように行うことはできない。主婦は、科学が自らの進む道を照らすような時代が来るまで、伝統

的な考えという一知半解のなかを歩まなければならないとミッチェルは主張する<sup>20)</sup>。

ミッチェルは、金を儲ける技術は、金を使う技術と比べ、科学技術ばかりでなく企業方法の側面でも優れていると考える。会計により体系化され、一連の複雑な取引における様々な要素すべてが1つの公分母、つまりドルの見地から示すことができるからである。金を儲ける際、ものの多様性にかかわらず、金銭的価値だけ考慮すればよいし、その価値は整然かつ体系的に均衡・比較・調整される。

ミッチェルによれば、主婦の価値となるとそうはいかない。「女性の利得は、営利企業と異なり、ドルに還元できないからではなく、その家族の身体・精神健康にあるからである<sup>21)</sup>。」満足のいく公分母はない。主観的経験は対立することもあるし、その経験の相対的重要性をめぐる考えは、気分次第でまた見る目で揺れ動く。「要するに金を使うことは、貨幣費用に対する公分母、また貨幣が気質の異なる人々に生み出すことができる様々な種類・程度の主観的満足に対する公分母も考案することができてようやく、金を儲けるような体系に還元できる<sup>22)</sup>。」

20) *Ibid.*, p. 12.

21) *Ibid.*, p. 13.

22) *Ibid.*, pp. 13-14.

ミッチェルは主婦の困難な課業を評価するが、チボル・シトフスキー (Tibor Scitovsky) によれば、この評価は均等にゼネラリスト全ての課業に当てはまるとしたうえで、こう述べる。

「主婦はゼネラリスト以上に多くの要因を比較考量しなければならぬ。そしてより多くの判断力を発揮しなければならぬ。またゼネラリスト以上に多くのことを理解する必要があるが、ゼネラリストほどは徹底して理解する必要はない。同時に目標が広いがゆえにそれを数量化しないし、量的測定という強力な道具が奪われる。判断が重要で測定ができない場合、経験と知恵が公式訓練や形式知識を機械的に補わなければならない。ただしゼネラリストに別に必要とされるものである。」Tibor Scitovsky, *The Joyless Economy: The Psychology of Human Satisfaction* (New York: Oxford University Press, 1992), pp. 265-266.

18) *Ibid.*, pp. 9-10.

19) *Ibid.*, p. 10.

ミッチェルは、女性が支出する際、追求する目的をみいだす。その目的は無意識で、経済的管理を混乱に陥れると考える。

ミッチェルは、差別を望む欲望が行為を導く際いかに重要な役割を演ずるか、古くはナッソウ・シーニア (Nassau Senior) が指摘し、最近ではヴェブレンがその著『有閑階級の理論』(*The Theory of the Leisure Class*) においてさらに緻密に展開したという。われわれは自分と隣人との間で他人の妬みを買うような比較をしがちである。この比較は経験の領域全体でみられるが、企業に多くの注意が払われている今日の貨幣経済においては、金銭的地位に向く。それゆえ貨幣所得は、露骨で明確な価値規準である。その比較は、根深い習慣が巧妙に用いられているに過ぎないとミッチェルは指摘する<sup>23)</sup>。

十分な金銭的資力に基づいて自分と隣人との間で妬みを買うような比較をもたらず最も単純かつ効果的な方法は、ミッチェルによれば、大きな家に住み、流行に合った服を着て、暇な時間をもって暮らし向きがよいことを示すことである。かくして貨幣経済が心のなかに作り出す乱費の習慣の気づかれていない目的は、自分自身と隣人の双方に自らの地位を十分に了解させることであるとミッチェルはいう<sup>24)</sup>。ミッチェルはこう述べる。

「金を使う課業において、主婦は、大部分、現在逆説的衝動の勢力下にある。自分自身のためばかりでなく、夫や子供のためにも、価値は金の価値と解釈されるのが普通である世間では、家族は裕福な状態にあると見せなければならぬ。仲間と比較する際、貧しさがみえると、夫の自己満足をかき乱すかもしれないし、子供が愉快で有益な仲間を作る機会を不利にするかも知れない。それゆえ世才は、主婦の自由になる所得でできる限り華やかに誇示するように勧める。主婦は、欲望や耽美的感覚を満たすために買うばかりでなく、社

会の尊敬やそれを御する快適な意識も買う<sup>25)</sup>。」

ミッチェルは、このように金を使う技術が非常に遅れた状態にある理由を分析した。この分析に基づく、無知、愚かな乱費、主婦の間での組織体系の不足について説くことは、無駄な行為になってしまう。こうしても家族生活をより効率的な支出組織にすることはできないからである。

ミッチェルは、社会状況を修正することに改善を期待する。家族より大きな集団に基づいて、家計支出形態が改革されているとみる。アパートの蒸気暖房、門番サービス、共用洗濯施設、ファミリーホテル、共同炊事場、純食品法、市のミルク保証、運動場、公園、図書館、託児所によって、現在困難な主婦の仕事を容易にする。これは、単位としての家族ではなく、当該社会が貨幣を支出することであるという<sup>26)</sup>。「家族より大きな集団に対して支出を計画する形態は、すべて費用を増大させ利得を減少させるように管理されているという事実にもかかわらず、確実な進歩をもたらずであろう前途有望な実験を表している<sup>27)</sup>。」

ミッチェルは、生理学や心理学の進歩に依存しつつ、家事の科学的土台はより広範かつ確実になると予測する。ミッチェルによれば、研究結果を広範な領域で役立てて、実際的な効果を得なければならぬ。女性向けの雑誌、女性クラブは、知識を広めることができそうなもう1つの主要な場である。その知識は、科学的料理、家庭衛生、公衆衛生、さらには単科・総合大学における家政学に関わっている。しかしながらこの教育を受けることができる女性は極めて少ない。それで多くの女性に教育を受けさせることは、自分たちの仕事の複雑性および責任が示されることに限定されるであろうとミッチェルはみる<sup>28)</sup>。ミッチェルは、本論文の最後に次のように述べる。

「しかし主婦の現在の苦勞の多くが営利企業や

<sup>23)</sup> W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 15.

<sup>24)</sup> *Ibid.*, pp. 15-16.

<sup>25)</sup> *Ibid.*, p. 16.

<sup>26)</sup> *Ibid.*, pp. 17-18.

<sup>27)</sup> *Ibid.*, p. 18.

<sup>28)</sup> *Ibid.*, pp. 18-19.

自治管理の拡大によって減じた後ですら、また主婦が今以上の教育を受け、知的職業階級の専門家の助言を享受できるようになった後ですら、主婦の課業は、金を使う際、その課業を重要視する人にとっては相変わらず処理しにくい。得ようと努力する価値があるものは何かという究極的な問題は、より健全な組織、よりよい教育、あるいは科学の助言によっては解決することはできないからである。女性はほとんどの場合、ほとんどの男性と同様、自らの時代・世代が既製のに与える因習的価値尺度を無批判的に受け入れ続けるのは疑いない。そのような人にとって、非技術的にすぎない問題は、些細な矛盾を和解させる問題であったり、より高い社会階級のかかなり上品な規準を達成しようとする問題であったりする。しかし分別と識見をもつ女性にとって生活する目的は、金を使う問題の一部分であるのが常である。その部分は、極めて感動的で不可解である。この点で金を使う技術は、企業や科学を技術的に追求することとは異なる。哲学や倫理学と同類である。知っていようがいまいが、主婦のあらゆる仕事には価値体系が包含されている。そしてこの価値体系が良くも悪くも影響を及ぼすのが、主婦が世話し交際する人々の健康、趣向、性格である<sup>29)</sup>。」

ミッチェルは、その論文「貨幣支出の遅れた技術」において、大要以上のような見解を披瀝してきた。次にミッチェルの所説を整理しながら検討してみることにする。

### Ⅲ ミッチェルの制度主義と人間行動の分析

ミッチェルは、金を使ううえでの難点を、個人の管理がほとんど及ばない広範な状況にみいだす。

制度は累積的に変化する経済過程とみなすミッチェルによれば、物々交換また貨幣の使用が始まった頃は、生産は、1つの単位としての家族に基づいていた。しかしその後分業、市場、産業革

命、鉄道などの要因が結合し、生産は、営利企業に基づいて再編された。

ミッチェルは、この間、金を大規模かつ効率的に使う単位を發展させず、金を使う技術は、金を儲ける技術に遅れを取ったとみる。家族は、営利企業が遂行するような分業がもつ利点を享受することができなかつたし、労働節約的機械を利用することもできないからである。家族生活の条件の下で、人間としての義務と労働者としての義務は峻別できないという。

ミッチェルは、金を賢く使う技術を發展させられない理由をさらに具体的に追求していく。すなわち主婦が、大規模営利企業と異なり、自らの精力を多くの業務に分散せざるを得ない点、家庭の壁の内部における因習、支出構造変化で除去しきれない特有の専門的難題である。また金を使う技術にとって重要な生理学や機能心理学が未発達であることにも注意を促す。主婦が科学から学ぶことができている以上、伝統的な考えに依存せざるを得ないとする。

翻って主婦の価値は、家族の身体・精神健康にあるから、公分母に還元できないとミッチェルは考える。そして今日の貨幣経済において女性が支出する際、追求する無意識的目的として、金銭的地位、あるいは他人の妬みを買うような比較を指摘する。これは乱費の習慣を作り出すことに繋がる。社会的価値に気を配ることであり、主婦は、逆説的衝動に支配されることになるかと捉える。

ミッチェルは、この状況の改善の見込みを、社会状況の修正、家計支出形態改革にみる。実際的な効果を得るために、科学的料理、家庭衛生、公衆衛生などの科学知識の拡大・その一助として女性向けの雑誌、女性クラブ、専門職クラスの女性教育に注目する。

しかしこのようなことによっても、ミッチェルの考えでは、得ようと努力する価値のあるものは何かという究極的な問題の解決には至らない。主婦の仕事に包含される価値体系は、感激的で不可解であり、金を使う問題の一部分であるからである。

<sup>29)</sup> *Ibid.*, p. 19.

このような脈絡において習慣が状況やそれに対する反応から除去する教化的要素は、因果関係の知識を踏まえた価値体系である。

それゆえミッチェルは、合理性の仮定によって消費活動は満足に説明できないとみる。金儲けの技法が重視される金銭文化に対して、金を使う技法は遅れを取っている。貨幣の使用は、金儲けに比べ金を使う際にはさほど重要な影響は及ぼさない。家計を経る支出は合理的ではない。個人の貨幣支出は、企業の目的に基づくものほどは計画化されていないからである。家計運営には、規格化・合理化されている社会習慣は流布していない。自らの地位を適切に了解させるべく、支出には対抗心や人の妬みを買うような比較を促進することが意図されていることも多い。ケン・マコーミック（Ken McCormick）がいみじくも指摘するように、消費者行動における「社会信号<sup>30)</sup>」の重要性は見逃すことができなくなってくる。貨幣所得を重要視することにより、誇示的消費、高額所得を見せびらかす類いの消費に結びつく。貨幣所得は、人生における成功の尺度であるから、その貨幣所得の情報が公知とならねばならない。高額所得がもたらす尊敬を享受するには、消費行動を通して所得が高いことを認めさせねばならない。こうして、自らの価値を社会に示す所得をはっきり表すことで地位が向上する。そこで金銭面での地位を明白に示すには、「行わざるを得ないけちな儉約を知られないように<sup>31)</sup>」し、大きな家に住み、流行に合った服を着て、暇な時間を持って余し金銭的に成功していることを誇示することが必要である<sup>32)</sup>。

これが無駄遣いができる身分を示す証拠となり、闕下で働く乱費の習慣が植え付けられる。他人の妬みを買うことが際立ってみえる世界で成功するには、体面を保つことが必要である。他人の妬みを買うような比較は、社会慣習や習慣化が維持する。特定の生活様式あるいは生活水準を求める欲望は、自らの所有物を社会にはっきりと表す欲求によって動機づけられる。ミッチェルのこの点をめぐる洞察力の源と考えられるヴェブレン<sup>33)</sup>によれば、「共同社会のなかで、この幾分不明確な通常程度の武勇あるいは財産を下回る成員たちは、仲間を尊敬される点では痛手を被る。その結果自らを尊ぶことでも痛手を被る。自尊心を通常作り上げるのは仲間が与える尊敬であるからである。常軌を逸した気質をもった個人しか、長期的には仲間の軽蔑にもかかわらず自尊心を保持することができない<sup>34)</sup>。」そこでヴェブレンは、「人々の尊敬を得て維持するためには、富や権力をもっているだけでは十分ではない。富や権力はありありと見えていなければならない。尊敬は証拠によってしか与えられないからである<sup>35)</sup>」と述べる。ヴェブレンによれば、富を得ようとする欲望は、

<sup>33)</sup> 因みにスタンレー・L・ブルーとランディ・R・グラントは、ヴェブレンの誇示的消費をこう説明する。「富を蓄積する人々が財を得るために働かずして略奪的に占有するのは、自身の物的欲望あるいは精神的・美的・知的欲望に頓着するためだけではない。むしろ自らの富をひけらかすようなやり方で消費したいと望んでいる。富の誇示は現在の金銭（貨幣）文化での権力・名声・名誉・成功を示しているからである。尊敬を得るためにそのような消費は浪費的でなければならない。貧しい人々は生きていくために働かねばならないが、その支出様式ですら浪費的な誇示的消費の要素を含んでいる。」Stanley L. Brue, Randy R. Grant, *The Evolution of Economic Thought* (Mason: South-Western, 2013), p. 401.

<sup>34)</sup> Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1975), p. 30. 村井章子訳『有閑階級の理論』筑摩書房、2016年、75ページ。——訳文は邦訳書によったわけではなく、私の自由に訳している。

<sup>35)</sup> *Ibid.*, p. 36. 同上訳書、81ページ。

<sup>30)</sup> Ken McCormick, *Veblen in Plain English: A Complete Introduction to Thorstein Veblen's Economics* (New York: Cambria Press, 2006), p. 109.

<sup>31)</sup> W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 15.

<sup>32)</sup> シトフスキーは、収入が多いことをわざと目につくようにするために、「気前よく金を使うこと、けちけちなこと、消費のコストをあまり細かく計算しないこと、コストが高いにもかかわらずというよりむしろそれがゆえに誇示的なものを購買すること」を挙げている。—— T. Scitovsky, *op. cit.*, p. 120.

どれほど共同社会の富が増大しても、満たすことはできない。誰もが財を蓄積する際、他人をしのぎたいと欲するから、また闘争は他人の妬みを買うような比較に基づく尊敬を得る競争であるから、明確な達成点に至ることはあり得ない。さらにヴェブレンはこう述べる。

「生活水準を構成する若干の習慣がどれ程相対的に強靱であるか決定するうえで習性というこの要素が演ずる役割は、人々が誇示的消費を妨げるいかなる習慣的支出をも断念することを大いに渋るのを説明するのに役立つ。この種の習慣がその根拠として関連づけられねばならない習性あるいは性向は、張り合おうとする際に用いる。そして張り合おうとする性向、つまり人の妬みを買うような比較をしようとする性向は、遠い昔から成長し、人間性に広く行き渡っている特質である。この性向は、容易に何らかの新しい形で精神的に活動させられ、いったん習慣的に現れた何らかの形の下では極めて執拗に自己主張する。個人がある一定の系統の名誉の支出に表現を見いだそうとする習慣をひとたび作ると、つまり一定の一团の刺激が張り合いという油断のない執念深い性向の下で所与の種類と方向の活動で習慣的に反応するようになると、そのような習慣的支出を断念するのを大いに渋る。そして一方では、金銭資力の取得が個人を益々大規模かつ広範に自身の生活過程を展開できる立場に置くときは常に、種族の古くからある性向が生活の新たな展開が取る方向を決定するうえで自己を主張する。性向のなかでもその分野で特定の関連した表現形式を既に積極的に受けているものがある。これらの性向は、新たに認められた生活体系が与えた鋭い示唆によって促進されており、性向を用いるために物的手段と機会が容易に利用できるから、個人の総力の新たな増加が自己を主張する形式と方向を形作る際、取り分け大きくものをいう。つまり具体的には、誇示的消費が生活体系の1要素となっているいかなる社会でも、個人の支払い能力の増大はある認められた系統の誇示的消費への支出となって現れやす

い<sup>36)</sup>。」

ミッチェルは、如上の点をめぐるヴェブレン思想を取りまとめている。

「社会において、金を儲けることが生活するうえで成功しているか否かの一般的に容認された試金石となっている場合、張り合おうとする生得の性向は金銭的歪みを呈する。……高価にみえる財を好むし、どんなに心地悪くても変化する様式に遅れないようにしていくし、愚かで心身を疲労させる社会の軽薄な言動を受け入れるし、費用がかかるがゆえに上品だとする嗜みを子供に教える。美的感覚はドル記号が刻印されている。……大金持ちの生活様式といわれているものにできる限り接近する。無駄を不快にする製作本能をもって生まれるけれども、誇示的浪費から満足を得る。……誇示的閑暇を習慣的に行ったり、あるいは妻や奉公人に自らのために誇示的閑暇を行わせたりする。……貨幣は、社会組織において取るに足らないものであるはずはないのが本質である。その社会組織の内部の渴望は、金銭的規準の特徴を深く有しているからである<sup>37)</sup>。」

自分と隣人との間で他人の妬みを買うような比較は、合理的に家計を管理することに相反する。制度によって何に金を使うか余儀なく決定させられるからである。ミッチェルはこう述べる。

「男性そして男性以上に特に女性は、貨幣の支出を個人の満足に基づいて計画を立てる。その際、企業の目的に基づいて貨幣支出に対する計画に与えるほどは注意しない。一時の気まぐれ、価格に無頓着、質の不知、従来へのやり方に対する執拗な選好に残されている範囲は広い。ウィリアム・マクドゥーガル (William McDougall) の言葉遣いでは、習慣、被暗示性、競争・模倣本能が導入さ

<sup>36)</sup> *Ibid.*, pp. 109-110. 同上訳書, 145 ~ 146 ページ。

<sup>37)</sup> Wesley Clair Mitchell, "The Place of Veblen in the History of Ideas," in *Veblen's Century: A Collective Portrait*, edited with an introduction by Irving Louis Horowitz (New Brunswick: Transaction Publishers, 2002), p. 57.



れねばならないのは、流行への追従、誇示的浪費、広告者へのぞんざいな依存を説明しようとする場合である。合理性の仮定はこれらの事実を説明するには不適切である<sup>38)</sup>。」

したがってミッチェルの考えでは合理性の仮定ではなく、家庭生活に一定の方向を与える習慣的な思考・活動様式に目を向けねばならないということになる。支配的な思考習慣である制度の影響を受けて、個人は共通の型に入れられるからである。ミッチェルはこう述べる。

「社会概念は社会制度の核心である。社会制度は世間一般の思考習慣に過ぎず、この習慣は、行為を導く社会規範として世間に認められている。この形で社会概念は個人に長年の慣例により認められた一定の権威を握っている。社会集団に属する成員たちがその社会概念を日々利用することによって、個人は絶え間なく知らぬ間に共通の型に形成される……<sup>39)</sup>。」

ミッチェルによれば、制度は個人活動に権威を振るう。それゆえ社会体制は、個人活動を共通の型に入れて作る。制度は個人行動を導く際に強力な作因であるので、個人行動を適切に説明するには制度的観点から行わなければならない。経済行動をそれが埋め込まれている制度に基づいて説明する。

世間一般の社会習慣が制度である。換言すれば制度とは、広く行き渡っている高度に規格化されている社会習慣のなかでも比較的重要なものである。心理的実在であり、観察中の共同社会で支配的な思考・活動の習慣である。制度が行動を形作る。行動を制度の枠組みのなかで研究する。

この観点からミッチェルは伝統的経済理論の誤りを看取する。正統派経済理論の類型は、ミッチェルの見地に立つと、人間性は、最初から引き継がれてきた出来合いのものであり、それゆえ前提と

みなし、人間行動は制度が生み出すことを無視して、人間はある特定の制度の論理に完全に支配されると思い込んでいる。個人は外生的選好にしたがって効用を静態的に極大化とする正統派経済理論の類型は、人間性における合理的要素を強調しすぎたあまり、その類型の合理的意思決定仮説は不適切である。「現状を説明するうえで、経済学者は、現代人が使用するのを漸次学習してきた概念をあたかも当然のこと、つまり人間として生まれつき備わっている能力の不可欠な部分……として扱うとき<sup>40)</sup>」重大な誤りを犯す。「合理性が特徴づける抽象的な人間性を主張する必要は論理的にはない<sup>41)</sup>」にもかかわらず、正統派経済学は人間性における合理的要素を強調しすぎ、個人の理解力・分析力を過大評価している。人間を実質のない形式的な人物に仕立てることに直結し、結果として不自然で浅薄で不完全な経済分析を行うに至る。「金銭概念は皮相的と軽視されるべき一連の空虚な象徴と考える重大な失策を経済学者は犯した<sup>42)</sup>。」ミッチェルが、本稿で取り上げた論文において、実際の消費者行動および世帯内部の経済行動は、合理的な利己心が規定するのではないと指摘するゆえんである。貨幣を支出する技術が遅れた状態にあるとし、意思決定は合理性の仮説に基づいて分析することはできないと考える。効用が極大化される合理的市場の概念からはかけ離れているとする。「人間の心とその作動形態を知ることは、マクドゥーガルが想定しているように、不可欠な素養の部分となる<sup>43)</sup>。」

こうして共に習慣化に関わる消費規準や自分と隣人との間で他人の妬みを買うような比較規準も学習される。

ミッチェルは、心理学者の見解に依拠して、人

38) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part II," *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 3, March, 1910, p. 200.

39) *Ibid.*, p. 203.

40) *Ibid.*, p. 204.

41) *Ibid.*, p. 216.

42) *Ibid.*, p. 216.

43) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part I," *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 2, 1910, February, p. 112.

間は極めて多数の生得の反射、本能、そして能力から出発し、世代から世代へと受け継いでいくと考える。それは個人の間では極めて異なっているものの、種に関しては変化は取るに足らない。生得能力は何千年もの間ほとんど変化していない。「しかし生得能力のなかには、学習能力がある。すなわち、無数の原初的性向の間で無数の『組合せ』を作る能力である。……実質的に不変の要素のなかで組合せがこのように変化するからこそ、文明人の行動は未開人とは異なる<sup>44)</sup>。」累積的变化の過程を通して、生得能力を養育する効果的な様式を発展させてきたからである。つまりどのように行動するか、その様式を身につけてきた。これらの極めて広範な社会の習慣が、累積的に変化しつつ世代から世代へと受け継がれて、今日の行動は以前と異なってくるし、標準化した支配的な社会習慣は、各世代が修正しつつ新たに学習していくこととなる。

---

<sup>44)</sup> W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, pp. 169-170.

これまでみてきたようにミッチェルは、金をどのように使うか、その様式を重視しつつ人間行動を考察・解釈して動態理論を立てる。伝統的な静态概念を拒絶するから、合理的活動に基礎づけて金を使う理由を説明することはない。金を使ううえでの習慣的規準を満たす過程で、人間行動の様式・内容が決定されることとなる。今日の貨幣経済では、張り合い、つまり社会において習慣になった一般に認められている生活規準や生活体系に恥じない行動をしたいという執念深い欲望も、生活・支出の習慣的尺度となっており、自身の社会環境から受ける刺激にどのように反応するか、その習慣的方法と関連してくる。換言すれば、この誇示的消費の原理は、ミッチェルの考えによると、習慣的な生活様式や生活体系に組み入れられているといえる。

したがって人間行動は、その文化と社会的地位に密接に関わっているから、文化に起源を有し、それゆえ文化が条件づける。時間と共に変化していく文化環境に人間行動は起因するという見地から、消費行動をミッチェルは動態的に捉えた。